

## 対象恒常性と“抱っこ”

——同胞を噛む3歳児事例を通して——

北 村 圭 三

### はじめに

子どもが歩き始め、手足の筋肉を自由意思で動かせるようになると、親は一般に躑けと呼ばれているあり方で基本的生活習慣を子どもに教え込む。それは子どもにとって、それまでの共生的で万能感的な母親依存による欲求充足様式が同じ母親によって許されなくなることを意味する。母親は、それまでの子どもに対する原初的没頭 (D. W. Winnicott) もしくは原初的没頭に近いあり方で奉仕から目覚めて母親自身の生活を取り戻していく。すなわち母親は子どもから独立した存在として機能していく。その過程で子どもは、自分自身の願望が必ずしも母親の願望と一致しないことに気づくようになる (M. S. Mahler)。いまや子どもは万能感的な母親依存による欲求充足様式が通用しないことを学び、逆に自由意思によって扱える手足の筋肉群を母親の要求する様式にもとづいて欲求を充足したり、我慢することを学ばねばならない。

その過程で子どもは母親に対して愛され続けたい気持ちと意思通りにならないことからくる怒りの気持ちの双方を体験するようになる。当初は子どもの自我が発達していないために2つの気持ちが同じ自分のなかで起っている問題として葛藤の内在化をすることが難しい。むしろ子どもにとって自分の意思通りにならないのは対象が悪いからであると外在化していく。しかし、一方で個人差はあるにせよ、攻撃衝動がもっとも急激に烈しく昂まる時期 (A. Freud) であるため、子どもは愛され続けたい対象として母親に破壊性をもつ烈しい攻撃衝動を直接向けることへの恐れを抱くようになり、次第に葛藤の内在化へと導かれていく。

このようにして子どもにとって対象としての母親は良い対象であるときも悪い対象であるときもあるが、全体的な対象 (M. Klein) としては良い対象であるという肯定的なイメージを抱くようになっていく。そこに対象恒常性 (M. S. Mahler) が育つ。思いやり (D. W. Winnicott) が見られるようになる。

その場合、子どものなかの対象恒常性がより確かなものへと育っていくためには、あくまで環境としての母親による補助自我としての“ほどよい母親 good enough mother” (D. W. Winnicott) の存在が重要である。もし、補助自我としてのほどよい母親の機能が不十分であれば、子どもの対象恒常性は不安定なものとなり、肛門期から前エディプス期にかけて獲得される自由意思にもとづく2次的自律的自我機能 (H. Hartmann) として健康的な自律性 autonomy (E. H. Erikson) の発達は望まれない。とくに、この時期に絶対的ともいえる母——子の支配——服従の関係の様式が貫かれるならば、1次的自律的自我機能 (H. Hartmann) に優れている子どもによっては、自己犠牲的になり、偽りの自己 false self (D. W. Winnicott) が形

成される早熟な自我発達 (M. James) に導かれることもあるし、強迫的な子ども (A. Freud, P. L. Adams) に導かれることもある。

しかし、このような場合には、この時期の子どもに対する補助自我としての“ほどよい”母親の機能が不十分であるだけでなく、それ以前の乳児期における“ほどよい”母親の機能としての“抱っこ holding”“あやし handling”にも問題があると思われる。たとえば、乳幼児期を通して、いつも母親のそばにおかれて甘えることが許されずに監視されるようにして育てられた強迫的傾向を示した登校拒否児の症例 (北村) などは、これに該当するであろう。

そこで本論文では、乳児期に“抱っこ”や“あやし”という環境からの供給が乏しく、強迫的に自律性の確立を志向する自我理想の強い母親のもとで育てられ、現に前エディプス期の年令を生活している子どもの事例を報告したい。主訴は落ち着きなく、弟を噛んで困るという訴えであったが、筆者は究極的には弟を噛む行為を、むしろ偽りの自己へ導かれることから免れえた子どもの強さと理解し、その子どもが対象恒常性を確立していく過程を検討し、対象恒常性の安定化に向けて、改めて環境としての母親からの“抱っこ holding”という供給が、いかに重要な意味を荷っているかということ明らかにしていきたい。

## 事 例

A児童相談所より3歳6カ月の女児マコがリファーされてきた。マコはIQ = 150と知能が高く、しかも運動技能も平均以上に発達していた。しかし、幼稚園での行動に落ち着きがなく、家では弟を噛むことが頻繁なので困っているという主訴であった。

### 第1回

マコは上品で丁寧な話し方をされるスポーティ姿の母親と1歳11ヶ月の丸々と肥えた、ひとなつっこい弟と一緒にやって来た。弟と対照的にマコは細身で、上目づかいで、どこか敵意のこもった用心深い表情をしていた。

早速母親・弟と別れてプレイルームにマコは入ることになったが、マコは特に抵抗はしなかった。しかし入室しても表情は硬く、部屋の様子を窺っていた。好きな遊びをしてもよいと言われたことには直接応えず、急に棚から粘土を取り出して型抜きを始めた。焦々した表情のマコは、すぐ型抜きをやめて、教育玩具に近い立体図形の型はめに取り組んだ。表情は真剣そのものであるが、焦々しており、次の瞬間、「入らない！」と叫んだ。セラピスト (以下 Th と略す) が、思わず手助けしようとしたが、マコは拒絶した。それでいて最後の図形を嵌め終わるまで追い立てられるように落ち着かず、焦々して独りでやり遂げた。ところが全部嵌め終わったからといって、喜びの表情は全く見せなかった。依然として焦々したまま忙しそうに砂場へ行き、ミニチュアの調理器具を次々と取り出し、砂場の枠板上に順々に並べていった。恰も多忙な主婦の独り言のように「御飯!」「コーヒー!」「お弁当!」などと叫んだり、「まだまだ!」と叫びながら、全く Th にはひと目もくれずに調理に没頭していた。あまりのマコの焦々した感情の昂まりに Th は圧倒されるほどであった。終わりの時間を告げられると、マコは「かたづけよう!」と言って、使った全ての遊具を元通りに戻して退出した。そこに満足感

は見られなかった。[今回のマコの動きには、Thの存在をマコの行動を暖かく見護ってくれ、行為の結果としての達成と共に喜んでくれる存在として受けとめているよりも、むしろマコの行動を目標達成に向けて監視する立場にある存在として捉えているように思われた。]

母親と弟のいる面接室に戻ったマコは、弟が母親にまわりついてる姿を見て、ひと言もいわず、歯ぎしりして怒りの表情を示した。カウンセラー（以下 Co と略す）は思わず「腹が立つネ」とマコの気持ちを言語化した。それほどマコの言語化しない歯ぎしりの怒りは迫力があつた。その迫力は、さらに Co をして次回より弟にベビーシッターをつけ、弟と母親の分離を試みた方がよいとの判断をさせた<sup>註1</sup>。

一方母親との最初の面接からマコの生育歴についての概略がわかった。

マコは赤ん坊の頃より気むづかしい子どもであり、夜泣きやかんしゃくをよく起した。かんしゃくは母親が弟を妊娠した頃から一段と激しくなり、母親はマコを育てにくい子どもであると思った。マコが1歳7カ月になった時、弟が誕生した。その時、マコに手を焼いていた母親はマコに言い聞かせる意味もあって託児をしてくれる他家にマコを1週間預けた。さらに都合でもう1週間実家に預けた。2週間後に母親のいる自分の家に帰ってきたマコは父親の顔を見ても知らないといった素振りを見せ、ベッドに寝ている弟にいきなり噛みついた。それ以来、母親が注意してもマコの弟に対する噛む行為は止まらないまま今日に至っている。その他偏食もはげしい。また弟と同じように御飯粒を撒き散らして食べるなど駄々っ子的な振舞いや注意しても頑になって口を利かない頑固さがあり、母親から見て、ふと憎らしく映ることもあった。

その反面、マコはリボンの歪みや衣服についた塵ひとつが気になったり、折紙の先端がキッチリと折れないと気が済まなかったり、洗濯物も端を揃えて折りたたむという几張面が目立った。もっとも、自分の思い通りにいかないと、かんしゃくを起こして、クチャクチャにした。但し、その間、母親に助けを求めることもせず、母親の目を窺うように見たりするだけである。

マコの生育歴について以上のように話された母親は丁寧であり、能弁であった。しかし、母親自身は「本当は自信がないんです」とのことである。たとえば、家族で外出する時、母親はまず自分の手でガス栓の始末、戸締まりをするが、大丈夫という自信がなく、夫にいま一度確認して貰わないと不安になるのであった。[相手の眼を見据えて丁寧に能弁に話される母親のなかに、どこかマコに共通した落ち着かなさが感じられた。]

## 第2回

マコは表情ひとつ変えないでオモチャの鉄琴やピアノを乱暴に叩いたあと、前回同様に砂場に向かい、忙しく調理をはじめた。突然「バケツ！バケツ！」とThの顔も見ないで叫んだりするので、Thは慌てて「ハイ、バケツ」と言ってマコに手渡すと、何も言わずに受けとるのであった。こんな調子でマコは調理にせわしく動いた。[マコの動きには、自分の要求を素直に出せない子どもが、ぶっきらぼうに要求したり、無愛想に動いているのに似ていた。]

マコは突然「おしっこ！」と叫んでトイレに走った。トイレから出て来たマコは砂場に直接行かず、三輪車に乗り、ついで手近にあった風船を膨ませようとした。しかし、うまく膨ら

まず、その風船をクチャクチャにして床に投げつけた。再び砂場に行き、マコは調理の続きをした。初めて水を用いてバケツの砂を米に見たてて研ぎ始めたが、いつまでも「まだ！まだ！」を連発して研いでいた。そのままの状態の時、終わりを告げられたところ、マコは突然マナ板を手にもち、それを砂の中に埋め、初めて Th を見てニヤッと笑った。〔マナ板の深い意味よりも、Th へのポジティブな反応としての笑いであると思われた。〕

面接室には既に弟が戻ってきていて大便をパンツの中にもらして、その世話を母親から受けていた。マコの表情は陰しくなり、歯ざしりをして怒っているのがよくわかった。

一方母親の話によると、先日友達の家で遊んでいる時、マコは突然仰向けに寝た振りをした。友達の母親は、マコが寝てしまったものと思い、風邪を引かないようにタオルケットをかけたところ、マコは目を開けてニヤッと笑い、「面白くないから死んだ振りしていたの」と応えたのである。〔これは、友達とうまく遊べず、その場から逃避していたマコが、自分にやさしくタオルケットをかけてくれた友達の母親に対する嬉しさから、自分が精神的にひとりぼっちで淋しいという気持を表現したものと思われた。〕

前回、自分の行動に自信がもてないと話されていた母親にとって、今回の来所時、退所時に夫々アクシデントが起った。来所に際して母親は車のガソリンの補給など万全を期したつもりで出発したにもかかわらず、途中でエンストが起こり、電話でその旨伝えたが、結局40分ほど遅れての来所となったのである。また帰り際には、弟の大便の失敗が追い打ちをかけるように起った。車のエンストの件で母親は「私は何事にも慎重を期して行動しているのに肝腎の点が抜けますの」と話しておれられたが、弟の大便失敗時には、「私は一生懸命やっているのに」と誰れに言うともなく愚痴られた。〔Co は母親の、なんともいえない歯がゆさの気持ちに対し、痛く共感をおぼえた。〕

### 第3回

母親の歯の治療のため1週間抜けて2週間振りのプレイであった。当初マコは第1回の時と同じように教育玩具であるマグネット文字を順序正しく配列したあと、粘土による型抜きをした。マコは自分の思い通りの型抜きができないため、唇を噛んで必死の形相でなん度も試みていた。Th が見るに耐えず、マナ板の隠している砂場に誘ってみた。マコは返事こそしなかったが、拒否しないで粘土を棚に戻して手を洗いに行った。濡れたマコの手を Th がやさしく拭いたところ、マコは黙って拭かれるままに身を任せた後、砂場に行き、調理セットを取り出さずに、ショベルカーを持ち、「これ何？」と初めて Th に向って問いかけた。嬉しくなった Th が、靴に砂が入るのを気にしているマコを見て、靴と靴下を脱がせてあげると、マコは裸足を砂中深くに入れて、いかにも気持ちよさそうにした。それから前回隠しておいたマナ板を取り出したが、終わりの時間となったので Th が折角のマコの楽しみを奪うような気がして謝ると、マコは悪戯っぽく舌を出し、マナ板を放り出したまま退室した。そして帰り際の玄関先で母親に靴をはかせて貰っている弟に対して、突然その腕にマコは噛みつき、サッとドアの取手まで引き返しざま Co と Th の顔を見てニヤッと笑ったのである。〔今回はマコの動きを見て、監視される大人の存在によって自縛的に行動しがちなマコが徐々に自分を暖かく包み込み、世話

し、見護ってくれる補助自我としての大人すなわち Th の存在を認知しはじめてきた変化の過程を示してくれているように思われた。]

一方、母親は自分自身の歯の治療で 1 週抜けたが、歯の治療と平行してマコに対する接し方を変えていった。これまで母親としてはマコに対して注意や指示をすることはあっても、やさしい言葉かけをしてこなかったが、そのことを反省して、母親自ら積極的にマコを受け入れていく言葉かけの努力をした。「マコちゃん、ママは好きよ」と母親はマコに話しかけていったところ、マコは、それまで身体を硬くして窺うように母親を見ていたが、その時、初めて恥しそうに首肯いた。そのマコの反応を見て、母親も嬉しくなり、マコを自分の方に引き寄せて抱っこをしてあげた。マコは抵抗せずに嬉しそうに母親の懷ろに自分の身を任せた。

そのことがあって以来、マコは、それまで人間が変わったように振舞いはじめた。母親を見ると、そばに来て「ママが好きな、ママが居なくなったら駄目なの」と言うようになった。それと並行して、これまで黙っていて突然弟を噛んでいたマコが、「アーくんが意地悪するの」とか、「アーくんは鬼のところに行ったのと違うの、悪いことするから（弟が母親のそばから居なくなり、母親が心配している）」と言語化して弟を批難するようになった。[母親の歯の治療が奇しくも母親のマコに対する接し方の変化、すなわちマコにとっての悪い部分の治療を象徴しているように思われた。]

#### 第 4 回

マコは来所するなり、すぐに玄関先でお菓子の景品の箱を開いて Th に見せた。可愛いウサギのペンダントであった。そのペンダントを大事そうに箱にしまってプレイルームの椅子の上に置いて遊具棚に向った。表情も明るく、焦々としたところが影をひそめていた。しかも、遊びが前 3 回と全く異なった方向に展開していった。マコはプラレールを取り出し、わからない箇所については「これどうするの?」と Th に尋ねながら軌道を敷いていった。時折「できない!」と叫ぶこともあったが、すぐ気を取り直して「まあ、いいか」と妥協し、納得しながら鉄橋、踏切、トンネル、信号機を配置して、円形に近い軌道を作りあげた。その軌道を 6 輪編成で走らせた。[今回、なぜ急にプラレール遊びになったのか理解できなかったが、母親の面接からマコのプラレール遊びが先日の母親と 2 人で電車で買物に行った体験に基づいていることが明らかとなった。]

母親の話によると、これまで買物などの外出には、つねに自動車を用いていた。しかも買物をしている間は、子どもを駐車場に残していることが多かった。その方が母親にとって何事も早く、事が運ぶ利点があった。ところが、マコが母親をいかに必要としているかがわかったので、早速、父親の在宅日に弟を父親に預けて、母親はマコと 2 人だけで電車に乗ってデパートに父親の誕生日プレゼントを買いに出かけた。但し、歩かない子は連れていけないという条件付きであった。[この条件は弟と一緒に連れていけないための説明も含まれていると、Co には理解された。] マコは途中何度か歩くしんどさを表情に出したが、その都度、母親に向かって「弟は歩かないから連れていけないのね」と語りかけて自分を励まして最後まで歩いた。マコは歩くことの他は電車に乗ること、デパートでの買物をとても喜んだ。とくに父親のプレゼン

トについては母親からマコの好きなように任されたことが余程嬉しかったらしく、店員に「これ、パパのよ」と言ったり、帰りには、「わたしがパパのプレゼント買ったのよ」と何度も母親に話しかけていた。

母親はマコとの買物の話を Co に報告したあと、「これまで何事をするにも自分ひとりで動きまわってする方が自分としてはよかったが、あんなに楽しそうなマコを見ていて、電車で一緒に連れていって本当によかった。これからの見通しがついた感じがします」と語られた。

## 第5回

これまでのマコの服装は可愛いイメージを連想させるものではなかったが、今回は白いフリルのブラウスに赤いスカートで身をつつみ、髪にリボンを結んだ可愛い姿でやってきた。早速 Th に靴下を脱がせて貰い、三輪車に乗って「ワオーッ」と叫びながら走った。続いてパンチキックを力一杯叩いた。その後突然「うんちノ」と叫んで部屋を出ていき、そのまま真直にトイレには行かず、面接室のドアを開け、母親と Co の顔を見て笑ってからトイレに走った。その時、母親が「弟がいなくて確かめて安心したものと思います」と話された。うんちを済ませたマコは再びマシンガンや黒ひげ<sup>註2</sup>など攻撃的な遊びに熱中した。

やがて攻撃的な遊びから転じて、マコは着せ替え人形を取り出して、自分の気に入ったドレスを着せ替えて楽しんでいた。[マコの遊びには、解放された子どもが対象のもつ性質に合ったあり方で攻撃性を発揮し、改めて健康的な自己愛を大切にしなければいけなかったことを感じさせられた。]

一方、母親の話から、マコが今回着ていた可愛い服装は先日再びデパートへ母親と2人で買物に出かけ、マコの好きな衣服を自分で選んで買ったものであった。もっとも、マコは自分で選べる嬉しさから、あれもこれもと欲しがったので、母親はマコの自分勝手さに閉口した。しかし、その一方で母親は、これまで西洋では子どもの服装に親がとくに関心を払わないものであると、耳にしていたので、自分もマコの服装には、あまり関心を払ってこなかったが、マコの喜んでいる姿を見て内心嬉しかった。[この点について、Co は前回の面接でマコ自身に可愛いイメージを抱かせることも、いまのマコにとって大切な要素かもしれないという話しあいについて、早速母親がそれを実行に移されたものと理解した。そして改めて母親の実行力の速さに感服した。]

## 第6回

マコは母親とペア・ルックで来室した。マコは早速ボシエットを開いて Th に見せた。ウサギのペンダントも入っていた。一緒に喜んでくれる Th を見て、満足したかのようにボシエットを机に置いて棚のオモチャに関心を向けた。「これ、なあーに」と尋ねながらリカちゃんハウス、パタパタ時計、おはじきなど次々に取り出して遊んだ。ひと通り試し遊びをしたあと、マコは折紙を持ってきて「鶴折る」と言って始めた。しかし、何度も折り直すが上手に折れなかった。それでもかんしゃくを起こすこともなく、折鶴を断念して奴さんと財布を折り、その2つを持って面接室の母親のところへ走った。いかにも嬉しそうであった。[母子のペア・ルックについて Co には母親の母子一体感を強調するための努力の表現のように思われた。さら

に、それに対する嬉しい気持ちのお返しが、マコの母親への財布と奴さんの折紙作品であったと思われる。]

一方、母親の話によると、先日、家族全員でC山へ電車、バスを利用してハイキングに出かけた。マコは頑張って歩いた。そのことについて、マコは帰り道に何度も母親に「わたし偉かったでしょう」と話しかけ、きょうも来所途中に同じ言を繰り返していた。[母親はマコとの2人だけの結びつきへの努力だけでなく、家族全員による身体全体を動かすなかでの触れ合いを大切にされて努力しておられるようにCoには感じられると同時に、その努力に胸の痛むのも覚えた。]すると、母親は「わたしは自分の責任において何かをしなければと思うと、ものすごく緊張して、実際きっちりやらなければ自分が嫌になるのです。また他人から悪く思われるのが、とても嫌なのです」と話された。

## 第7回

Coの出張、弟の発熱が重なり、マコは3週間振りの来室であった。マコは初めて白い縫いぐるみの熊を抱いてきた。大事そうに白熊を椅子に坐らせたマコは、棚からオセロ盤を取り出した。「これ、どうするの」とThに尋ねたあと、マコが白石をもち、Thに黒石をもたせて、2人で交互に置いていった。2人で盤上に並べ終わると、パーフェクションゲームに挑戦した。その時、マコは突然「うんち!」と叫び、その場に下着を脱いでトイレに走った。トイレから出てきたマコは自分で下着をはこうとしないで、Thに要求してきた。パーフェクションゲームの続きをしようとはせずに、棚から粘土を取り出して遊んだ。その際、オセロのときに見たように「フオークは替わりばんこよ」などと言って、Thと2人で楽しそうに遊んだ。

一方、母親の話によると、この1週間弟の発熱で弟の世話にかかりきりであり、マコには何もしてやれなかった。母親と2人で買物以来、弟を噛むことが見られなくなっていたが、弟の発熱の世話で再び弟を噛むことが出現するのではと、母親は思ったが、その心配は要らなかった。

[今回のマコの遊びには、これまでの母親の努力によって、マコのなかに弟の発熱と母親の世話が、自分から母親を取られるという恐れをもたらすことになっていないことを示しているように思われた。なぜならば、マコにとって白熊の縫いぐるみが過渡対象的な要素をもち、Thとのやりとり遊びのなかに“あやし——あやされる”相互依存関係が見い出されているように思われたからである。]

## 第8回

マコは1・2回目の時のようにブスッとした不機嫌な表情で来室した。絵を描き始めるが、急に「辞めよう」といって、ぬり絵に移るが、これも途中で辞めてしまった。しばらくして、マコは棚から一体の着せ替え人形を取り出して、その人形に次々と帽子を被せては脱がせていたが、気に入った帽子が見つかった時点で、その人形を、子ども用の自転車のうしろに乗せ、自分で運転した。この時、今回初めてThを見て笑った。マコが笑ったのは、この時のみであり、その後は3色のスタンプを用いて、画用紙に3列に色分けして押し続けて終った。

母親によると、弟の発熱のあと、一家全員が流行性結膜炎に罹り、父親が勤めを休むほど症

状がひどかった。母親も思うように動けず焦々するし、家の中は引っくり返っていた。つまり家族みんなが不機嫌な状態であった。やっと来談日近くなって回復に向ったが、大学祭のため自動車の規制があって途中で車を降り、母子3人で長い道のりを歩いてきたのである。Coは「無理されなくてもよかったのに」と伝えたところ、母親は大学祭で自動車で来談できないと聞いていただけに、逆に是が非でも歩いて行く覚悟をしていたとのことであった。さらに母親は、自分は人一倍建て前を気にするところがあり、しかも以前から権威のある人の言葉の裏を考えて行動するところが抜けないということであった。最後に母親は、親子面接の終結に関連して「私の性格はきつく、マコも私によく似ており、将来、他人とうまくやっていけるのかしらと、気がかりです」と結ばれた。Coは、すぐには言葉が見つからず、「御心配な気持ちはあるでしょうが、大丈夫だと思います」と答えた。〔あとで、マコの遊びには、家族全員が流行性血膜炎に罹り、十分体調が回復していなかった母親の頑張りに合わせて来室してきた様子（スタンプの3色：母・マコ・弟）を表わしていると思われた。〕

## 第9回

母親とマコは初めて連絡なしに30分遅れて来所してきた。Coはむしろ安堵した。

マコは入室すると、手に持っていたアメ玉を口に入れた。マコは棚から床屋さんごっこ人形を取り出し、「これ、どうやってするの?」と尋ねながら粘土を用いての床屋さんごっこ遊びをした。床屋さんごっこ人形が丁度2体あり、Thと2人で遊べた。しばらくして「お椅子がない」といって、Thに人形を坐らせる椅子を用意させ、人形を坐らせた。続いてマコは「テーブル持ってきて」と要求し、用意されたテーブル上に、粘土で料理を作り並べた。マコの表情は以前のように焦々した、追いたてられ、監視されているような印象を与えなかった。また、マコは風邪を引いていて何度もThに鼻水を拭いて貰っていたが、床屋さんごっこ遊びが気に入ったのか、退室を渋った。しかし、マコは靴下についた粘土くずをThに自分の身体をもたせかけて取り除いて貰うと、自分から退室した。〔今回の床屋さんごっこ遊びには、マコと弟の2人に対して母親が一生懸命世話している様子がマコによって再現されているように思われた。〕

母親の話によると、この1週間に、1回は家族全員で、もう1回は母子3人でハイキングに出かけた。母親は自分でもよく歩くようになったと思うと同時に、最近になって、やっと一歩ずつ子どもを育てようということが実行できるようになったと思った。

さらに母親は今後のマコへの対処について「マコが折紙でうまくできない時など、私も一緒になって“ママもうまくできないわね”と声をかけてあげることが大切ですね」と話され、次回でもって終結することへの心構えをされていた。

## 第10回

弟の風邪のため、1週抜け、2週間振りの来室となった。Thが急な事情で来ず、インテーク時のThが急遽マコの相手をするようになった<sup>註3</sup>。マコは、このことについて承知してくれただけでなく、最後の回ということを意識しているかのように部屋の空間を思い切り使って遊んだ。ソファベッドや椅子、三輪車などを「これ邪魔、これも邪魔」といって部屋の隅に運



び、広くなった空間にブラレールを次々に繋げていった。第4回の軌道を数倍拡大したものであり、出発駅には給油所が置かれ、途中の軌道には、信号機が2箇所、鉄橋、トンネルが1箇所ずつ設けてあった。

マコは他のどの電車よりも新幹線列車を好み、ヒカリ号を走らせた。しかし、ヒカリ号が鉄橋を渡り終えたところで、マコはヒカリ号を停車させた。そして、逆にヒカリ号を出発駅まで引き返らせて、「ガソリン」と言いながら給油した。給油が終わると、信号を赤から青に変えて再びヒカリ号を走らせ、無事一周させて出発駅まで走り終わらせた。[今回の遊びで、マコが母親という補助自我の援助を受けて、さらに広い世界に向って旅立っていこうとしている姿を思わせた。]

一方、母親は、最後の面接ということもあって、自分とマコとの関係を改めて整理された。弟はいつも母親のベッドにやってくるが、マコは今日まで一度も母親のベッドに来たことがなかった。そのマコが近頃ミッキーマウスの縫いぐるみを枕もとに置いて寝るようになった。それだけでなく、マコは寝る時に決って「ママ、きょう誰れと寝たい」と、ママに聞き、「マコちゃんの横で寝たい」というと、マコは喜び、母親が寝るだけの空間を空けて、実際には母親は寝ていなくても、そのまま安心して朝までぐっすり眠るようになっている。[母親の話から、マコは、母親が実際にはマコと一緒に寝ていなくても、母親が自分を愛してくれているという、やさしい言葉によって弟が母親に甘えていても、ひとりで耐えられるようになっていると、Coには思われるのであった。]

## 考 察

### 肛門期特有の2次的自律的自我機能の問題

3歳4カ月のマコの知能指数は150と高い。手指の分化も折紙作りができるほどに発達している。全体的にみて、マコの1次的自律的自我機能(H. Hartmann)は極めて優秀である。

マコの問題は、むしろ来所当初に顕著に見られた順序通りにきっちりやり遂げないと気の済まない几張面さと融通のなさ、終始いらいらした落ち着きのなさ、思い通りにいかない時のかんしゃく、怒りを抑えたような窺うような眼ざしと保護的大人の介入の強い拒否、塵ひとつ気にする潔癖さ、弟への烈しい怒りと噛みつき、駄々っ子の振舞いなどにある。これは2次的自律的自我機能(H. Hartmann)の問題である。このうち頑固さ、几張面さ、潔癖さなどは、排泄訓練の時期にある2～3歳の子どもに獲得されていく特徴であり、肛門期的性格(S. Freud)と呼ばれている。

ところでE. H. Eriksonは2次的自律的自我機能を心理・社会的な観点から8つの発達段階にわけ、2～3歳の子どもの発達課題は、精神的に健康な自律性の獲得にあるといっている。健康な自律性とは、子どもが他者によって、自分のとる如何なる行動も信頼されているという前提のもとに、自己をおのれの能力に応じてコントロールしていくことである。この観点からみると、几張面さ、潔癖さ、頑固さは健康な自律性を構成する要素であるが、それらの要素は、子どもが他者とりわけこの時期の子どもにおける教育の中心的役割を背負っている母親の人物

から受け容られ、信頼されているという前提の上に獲得されているものであるかどうか、健康な自律性を構成する要素であると決める重要点となる。

この点に関して、マコの場合は、終始いらいらした落ち着きのなさ、怒りを抑えたような窺うような眼ざし、保護的な大人の介入への強い拒否などが顕著であり、そこにマコの行動が本来的に保護的・援助的である大人から信頼され、見護られているなかで自己確信に導かれているものでないことが明らかである。もっとも、これにはマコが生来的に夜泣きやかんしゃくが強く、母親の手をわずらわせることが多かったというマコ側の要因も加わっているであろうと思われる。

しかし、いずれにしても、母親をして時折マコが憎らしく映ることがあると言わしめている点は、マコの行動が母親から信頼され、見護られているという関係のなかで展開されている性質のものでなかったことを物語っている。

### 自己愛の問題

マコの行動が心理・社会的な意味での自律性のあり方に問題があることは明らかとなった。そこで、いま一步突込んでマコの行動における自律性の問題をリビドーの発達という観点からみると、マコの行動は自己愛のあり方、とくに2次的自己愛（A. Freud）のありかたに問題があると思われる。

本来的な女の子の健康的な2次的自己愛の姿は、マコが母親から好きに選んでよいと、受け容れられて自分で選択した白いフリルのブラウスと赤いスカート、リボンに身を包んで現われた第5回においての後半、着せ替え人形に自分の気に入ったドレスを着せ替えて楽しんでいた姿に見い出される。そこには、マコが愛情対象である母親によって受け容れられているという関係のなかで、女の子としての自己を大切に、綺麗にしていきたいという健康的な自己愛がある。

これに対して、マコが第1回・第2回に見せた調理場面は明らかに母親への同一化であり、教育玩具や初期の折紙作りなどは母親の自我理想への同一化であると思われる。しかし、いずれの同一化にも、マコが自ら喜んで同一化しているというよりも、敵意の感情の外在化が抑えられたかたちをとっていることは、焦燥感や拒絶感、かんしゃくなどに示されている。とくに塵ひとつ気にする潔癖さ、完全癖的な几張面さには、他者を受けつけない、共有することのないマコの自己維持の姿がある。

したがって、このようなかたちで同一化されたマコのありかたは、愛情対象である母親に対する反動形成的な自己愛と呼べるものであると思われる、それは健康的な2次的自己愛ではない。

さらに、マコの行動には、反動形成的自己愛のありかたとは異なった自己愛が見い出される。それは弟と同じように食事場面で飯粒を撒き散らすなどの駄々っ子的仕種や友達と遊んでいて面白くなくなったからといって、死んだふりをしていた仕種である。これらの行動は、いずれも自分の手足の筋肉群を自由意思のもとに、外界に向って自信をもってコントロールしていくという自律性を放棄して、それ以前の口唇愛期の愛情対象からの世話を受動的に期待している

という性質のものである。その意味で、この種のマコの行動は、退行的自己愛と呼べるものと思われる。

以上の反動形成的自己愛と退行的自己愛のほかに、マコの行動には、もうひとつの異なったかたちの自己愛の姿があるように思われる。それは来所の主訴となったマコの弟を噛む行為である。ものを噛み砕く能力は、本来的には、自分の歯で外界の食物を阻しやくし、自己の一部にしていくという自律的能力の一部である。いわゆる歯による攻撃衝動は対象関係において対象愛と融合していく (A. Freud) ものであるとされている。

確かに愛情対象である母親との関係においては、マコの攻撃衝動は既述のように不十分であるが、融合されていたといえる。しかし、母親という愛情対象をめぐる弟の誕生というライバル出現と同時に、2週間母親から完全に分離され、愛情対象喪失の危機に見舞われたマコにとって、弟の誕生はライバル葛藤を体験した。そして1歳7カ月という自我の未熟な時期のマコには、ライバル葛藤における攻撃衝動を中和させる (H. Hartmann) ことは困難であったと思われる。この点は、M. S. Mahler が「母親が物理的に不在である時に、本能的欲求や肉体的不快の状態にかかわりなく、比較的安定したままの信頼に足る内的イメージの存在が不在の母親の代用となりえるのは、対象恒常性がうまくいったからのことである。そうしたことは2歳以前に起こらない」と指摘していることからいえる。

ところで「(弟は) 鬼のところに行ったのと違う (第3回)」というマコの発言から、マコの弟への噛みつきが「ライバルに対する無意識的な死の願望 (A. Freud)」が働いていたと解釈してよいかどうかは分からないが、少なくともライバル葛藤の外在化としての攻撃的・排他的自己愛であると考えすることは可能であろう。そして、この噛みつきが3歳6カ月まで続いていたことは、対象恒常性との関連で問題があったと考えられる。

### 対象恒常性と“抱っこ”

マコの行動には、心理・社会的意味での健康な自律性のありかたや、健康的な2次的自己愛としてのありかたに問題があり、それらは愛情対象である母親をめぐる葛藤の外在化であることが明らかとなった。しかも、それが愛情対象である母親との対象恒常性が安定化し、確かなものとなっていく過程での問題であるという点である。なぜならば、もしマコの対象恒常性がうまくいっているならば、IQ = 150 と知的に高いがゆえに、母親を“私でないもの”として認知<sup>註4</sup>しているマコが、反動形成的な自己愛や退行的自己愛、攻撃的自己愛といった2次的自己愛のかたちをとらずに、“共に生きる (D. W. Winnicott)” 喜びというありかたでの健康的な2次的自己愛を発達させていたであろうからである。

それでは、なにゆえに対象恒常性がうまくいっていなかったのかということであるが、その検討のために、まず母子の面接過程を通じて、マコをして対象恒常性の安定化へと導いていったもっとも基本的なものが何であったかをみていくことが先決であろう。

マコは来談当時まで、母親のそばで折紙などしている時、身体を硬く緊張させながら母親を窺うように見ていた。そのマコが「ママが好きな、ママがいなくなったら駄目なの (第3

回)」と母親に自分の気持ちを強く訴えるようになった。マコをして、このように言わしめたきっかけは、母親からの初めての「マコちゃん、好きよ」という語りかけに始まったマコを引寄せた抱擁である。D. W. Winnicottによれば、「“抱っこ”は、“共に生きる”という概念ができてあがる以前に子どもに与えられるすべての供給」である。すなわち環境としての絶対的依存を満たすありかたなのである。マコは、母親に対して絶対的依存としての“抱っこ”を欲していたのである。この点に関して、既に第2回の面接において、母親が、マコの友達の家での死んだ振り事件におけるタオルケットの話を持ち出して、マコの孤独な気持ちを洞察されていたことが、大きな伏線となっていたと思われる。

ところで母親による“抱っこ”は、単に物理的な抱擁にとどまらないことは、D. W. Winnicottが「すべての供給」と言っていることから明らかである。マコの場合には、既述の母親からの「マコちゃん、好きよ」という抱擁に始まる以下の働きかけが“抱っこ”に該当するであろう。マコだけ連れての買物（第4・5回）、マコの好きなドレスを買って着せたこと（第5回）、母子がペア・ルックの服装をしてきたこと（第6回）、弟の発熱時に十分な世話をしやれなかったマコに縫いぐるみの白熊を買ってあげたこと（第7回）、風邪気味のマコにアメ玉を持たせてあげたこと（第9回）などである。そして、これらの“抱っこ”は、母親からのマコに対する共感による同一化にはかならない。

このような母親からの積極的な“抱っこ”は、マコに大きな変化をもたらしている。まずは既述のように愛情対象である母親に対して「ママ好きよ、ママがいなくては駄目なの」と独占的に自分にとっての大切な人であることを主張することに始まり、その母親にとっても、マコにとっても大切な父親のために誕生日のプレゼントを喜んで買ってくる（第4回）という“思いやり”を見せたことである。続いて山へのハイキング（第6回）という歩くことのしんどさに耐え、駄々をこねることなく最後まで頑張り通し、母親の期待に応えられたことを「わたし、偉かったでしょう」と喜んで母親に報告していることである。さらには、第6回の面接終了時にプレイで折った折紙の財布、奴さんの母親へのプレゼントである。そして、なによりも弟を噛むことがなくなったことであり、弟の発熱時にも、母親からの十分な世話が与えられなくても、縫いぐるみの白熊で自己を落ち着かせるという過渡対象<sup>註5</sup>による過渡現象（D. W. Winnicott）を示し得たことである（第7回）。同じことは、就眠時に、母親が実際にそばにいないとしても、ミッキーマウスを横において安眠していくマコの姿に見い出される（第10回）。

この過程で大切なことは、買物に連れていったマコの喜ぶ姿を見て、母親自身が嬉しくなった（第4・5回）と、母親が語っているように、ここに至って、1次的自律的自我機能に優れているマコと母親が“共に生きる”という相互依存関係（D. W. Winnicott）において生きていることの喜びを分かち合うようになっている点である。さらに弟を噛むことがなくなり、過渡対象の使用が見られるようになってきたことは、愛情対象である母親との対象恒常性の安定化がマコのなかで着実に育っていることを示していると思われる。

また環境としての母親からの“抱っこ”の成果はプレイ場面においても、セラピストによる“抱っこ”——濡れたマコの手を拭いてあげる、靴下を脱がせてあげる、鼻水を拭いてあげる

など——と相まって、様々のかたちで現われている。それらは、ポシエットの中味を見せる（他者信頼）、素足を気持よく砂中に入れる（潔癖さの減少）、遊びにおける「まあ、いいか」発言（几張面さの減少と妥協）、黒ひげ・パンチキックなどの攻撃的な遊び（攻撃衝動の認められた表出）、セラピストとの碁石などによる“やりとり”遊び（社会化）、2体の人形に対する理容や食事の世話（思いやりというかたちでの母親への選択的同一化）、ひかり号のガス欠と補給（自我による自己修復）などに見い出される。

以上のことから1次的自律的自我機能に優れているマコにとって、対象恒常性がより確かな安定したものとなっていった最も基本的な力となったものは、環境としての母親からの“抱っこ”という供給であることが明らかとなった。換言すれば、これまでのマコには、安定した対象恒常性が育つ過程に必要な母親からの“抱っこ”の供給が欠けていたということである。すると、マコの反動形成的な自己愛や退行的自己愛、攻撃的自己愛といったかたちの様々の行動は、マコが偽りの自己（D. W. Winnicott）へと向かうことなく、本当の自己（D. W. Winnicott）を生きるために愛情対象である母親とのあいだに安定した対象恒常性を確立していくための抵抗としての戦いであったと考えられる。

なお、ここで“抱っこ”そのものが退行であり、そのような退行をさせることは望ましくないのではないかと反論もあると思われる。しかし、本事例から“抱っこ”の供給が子どもの対象恒常性を確かなものにしていったという事実をもって、D. W. Winnicottの「依存への退行こそが、それまで停頓していた情緒発達を前進させる契機となる」という見解が改めて支持されたものと考えられる。

そのことは、すなわちマコの健康的な自律性が獲得されていったことを意味する。

次に残された課題としての“共に生きる”以前の段階に必要な母親からの“抱っこ”の供給がマコの場合になぜ欠如する事態を招いていったかについて検討していきたい。

## 母親のアイデンティティと“抱っこ”

上の問題を検討するには、母親の生活史におけるアイデンティティとの関連をみていくことが重要である。

マコの母親は知的にも、社会的にも認められた家庭の長女として生まれたが、父が厳格な人格だったために、マコの母親は甘えた記憶がないとのことであった。マコの母親は、いつしか甘えることは許されないものとして成長した。学生時代には他の学生はノートの貸し借りを気軽に起こない、要領よく学生生活を送っているのに、自分はそのような行為が許せず、毎回出席して自分でしっかりノートを取らないと落ち着かず、気が済まなかった。しかも、他者に頼ることができず、自分ひとりが頼りであると思う気持の強かった母親は、大学の講義で断定的に説明されると、「先生は、あのように言っているけど、あれは嘘だ。その裏に何かがある」と考え、すぐあとから「私なら、こうする」と反駁していた。

大学を卒業して、まもなく結婚したが、幸いにも夫は、かなり年上でやさしく、協力的であった。実際、家庭の一切はマコの母親の好きなように任せられた。それだけに母親は何事もき

っちりやり遂げようと思い、頑張った。マコの育児に関しても、日本の母親は、子どもにベタベタしており、子どもにいい加減なことを言って胡麻かして事を済ますことが多いとして、反撥をおぼえていたために、「大人は大人、子どもは子ども」といったように親子のあいだに一線を画して育てようと努力してきた。そのためマコが赤ん坊の時から寝室は親子別々であった。なおマコの夜泣きなどはひどかったが、母親は抱擁したり、マコの欲求するままに世話するといった“抱っこ”は極力控えた。〔事実マコは母親のベッドに行ったことがなかったが、むしろマコが母親のベッドに行くことが許されてなかったものと思われる。〕

やがて、マコが手足を自由に動かせる段階になった時、母親は教育玩具的なものを“呈示 presenting” (D. W. Winnicott) するが、マコがそれを思い通りにできなくて、かんしゃくを起すことがあっても、言葉で言い聞かせることが多かった。弟の誕生時におけるマコとの2週間の別離もマコに独りでいることに耐えさせることが大切と思ってやったことであった。しかし、結婚してから今日まで、母親は自分の描く理想に向って努力したが、自分の思うように事が進まず、「何事に対しても慎重の上に慎重にやっているのに肝腎のところは抜ける (第2回)」ような事態が重なって、母親は次第に自信を失っていったのである。

以上のことから、母親のアイデンティティと“抱っこ”の関係について考えてみよう。

社会的にも、知的環境的にも恵まれた家庭の長女として生まれたマコの母親は、厳格な父のものにあって「同一化は持続的・選択的・一貫的になることによって初めて次第に統合されて自我の一部になり、その構造を永続的に変え、自我の防衛システムの組織化、安定化を支える (E. Jacobson)」ものであるように、自律的に生きる厳しい父の姿を通して自分に厳しく自律的に生きることを自分の内的な理想像すなわち自我理想として同一化していったのである。そして、厳格なまでの自律的に生きるという自我理想が「自我理想のもつ卓越した不思議な貴重な性格は、その非現実性にあり、そして、また現実の自己からの隔たりにある。通常、われわれはこのことをよく知っているが、自我理想はわれわれの現実的行動に途方もない影響を及ぼす (E. Jacobson)」と言われてるようにマコの母親の現実の行動を支配していった。つまり、マコの母親をして、現実をあるがままに受け入れることよりも、自我理想による万能感的行動へと導いていったものと思われる。

その結果、マコの母親を支配した万能感的な厳格なまでに自律的に生きるという自我理想が、マコの対象恒常性を確かなものにしていく基盤の役目を荷なう環境としての母親からの“抱っこ”の供給を阻んだものと考えられる。

しかし、幸いにも母親は、年上でやさしく、寛容で協力的なマコの父親と生活を共にしていくなかで、母親を支配していた自我理想があまりに現実の自己と隔たりのあるものであることに気づかされていったのである。すなわちマコの母親の自覚は、マコの父親からの“抱っこ”によるわけである。マコの父親を通じて、マコの母親は初めて“抱っこ”のなかで依存することの有難さを知ったのである。この経験が、マコに対しても“抱っこ”の供給が抵抗なく出来るようになっていったものと思われる。そこから、マコの母親は“抱っこ”がもたらす“共に生きる”ことの喜びの素晴らしさを体験しえるようになったのである。その意味で、マコの父

親が果たした“抱っこ”の役割は非常に大きく、重要であったといえる。

## 註

1. 弟は1歳6カ月であり、この時期は“あと追い”と“とび出し”の行動が母親を中心に顕著にあらわれる(M. S. Mahler)ため、母子分離に対する一抹の不安があったが、次回からの実際の分離は一応成功した。
2. 黒ひげの海賊の顔を載せた樽に剣を次々刺し込んで、黒ひげの首をはねとばすことをねらった遊び
3. Thが来られない旨、母親に連絡をとろうと何度も試みるが、不在で連絡できず、やむなくインテーク時のThがマコの相手をした。その際、マコの状態を見て終結を延期するかどうか母親と話しあうことにしていた。
4. D. W. Winnicottは「私でないもの(Not Me)」の認識は知能の問題である」と述べている。
5. 原語はtransitional objectであり、移行対象と訳されているが、ここでは牛島定信の過渡対象を採用した。

## 参考文献

- A. Freud The Ego and the Mechanisms of Defense. The Writing of Anna Freud Vol. II International Universities Press 1966. 黒丸正四郎 中野良平訳 自我と防衛機制 アンナ・フロイト著作集 第2巻 岩崎学術出版社 1982
- A. Freud Normality and Pathology in childhood, The Writing of Anna Freud Vol. VI International Universities Press 1965 黒丸正四郎 中野良平訳 児童期の正常と異常 アンナ・フロイト著作集 岩崎学術出版社 1981
- D. W. Winnicott The Maturation Processes and the Facilitating Environment. The Hogarth Press 1965 牛島定信訳 情緒発達と精神分析理論 岩崎学術出版社 1978
- D. W. Winnicott Playing and Reality. Tavistock Publications 1971 橋本雅雄訳 遊ぶことと現実 岩崎学術出版 1981
- D. W. Winnicott The Family and Individual Publications. Tavistock Publications 1965 牛島定信監訳 子どもと家庭 誠信書房 1984
- E. H. Erikson Childhood and Society. W. W. Norton 1963 仁科弥生訳 幼児期と社会 みすず書房 1977
- E. H. Erikson Psychological Issues Identity and the Life Cycle. International Universities Press 1959 小此木啓吾編訳 誠信書房 1973
- E. Jacobson 伊藤洸訳 自己と対象世界 岩崎学術出版社 1982
- H. Guntrip 小此木啓吾 柏瀬宏隆訳 対象関係論の展開 誠信書房 1982
- H. Hartmann Ego Psychology and the Problem of Adaptation. International Universities Press 露田静志 篠崎忠男訳 自我と適応 誠信書房 1967
- 原 俊夫 鹿野達男編 攻撃性 岩崎学術出版社 1979
- H. Segal 岩崎徹也訳 メラニー・クライン入門 岩崎学術出版社 1977
- 北村圭三 神経症的登校拒否を示した一人っ子の事例 青少年指導事例集 1205~1208 東京法令出版社 1976
- M. Davis & D. Wallbrige 猪股大二監訳 情緒発達の境界と空間 星和書店 1984
- M. Klein 西園昌久 牛島定信編訳 子どもの心的発達 メラニー・クライン著作集1 誠信書房 1983
- M. Klein 西園昌久 牛島定信編訳 愛、罪そして償い メラニー・クライン著作集3 誠信書房 1983

- M. S. Mahler 高橋雅士他訳 乳幼児の心理的誕生 黎明書房 1982
- M. James Premature Ego Development : Some Observation upon Disturbances in the First Years of life. Int. J. Psycho-Anal., 41, 288—294.
- P. C. Horton 児玉憲典訳 移行対象の理論と臨床 金剛出版 1985
- P. L. Adams 山田真理子 山下景子訳 強迫的な子どもたち 星和書房 1983
- 牛島定信 過渡対象をめぐって 精神分析研究 Vol. 26, No. 1 1—19 1982
- S. Freud 懸田克躬 高橋義孝他訳 性欲論症例研究 フロイト著作集 人文書院 1982

後記：投稿に際し、御校閲を賜った森野礼一教授、滝野匡悦教授に厚く御礼申し上げます。また本事例の子どもを担当者である松本潤子氏をはじめケースカンファレンスに参加し、記録を克明にとって下さった学生諸氏に対し、心より感謝致します。

原稿受理 1985年9月20日